

〈資料紹介〉

田中重太郎博士蔵『新古今和歌集』断簡

鈴木徳男

故田中重太郎博士ご所蔵の『新古今和歌集』断簡とは、卷十三恋歌三から卷十八雑歌下までの残葉を一冊に集めたもので、縦一七・五糎、横十六糎の柙型本、列帖装(ただし、現存の装丁は表紙とも新しく全面改装されている)、本文料紙は雁皮、墨付十五丁、行数一面十行、一首二行書の古写である。歌数はミセケチ一首を含めて八十八首。

田中先生のご生前、ご依頼を受けて調査したところ、ノートルダム清心女子大学図書館蔵、正宗敦夫文庫本の断簡と同一のものであった。すなわち、「ナ・ハ・フ・ヤ」の略字で撰者名注記がみえ、隠岐で除かれた歌には右肩に「ハ」の符号と「被出了」の注記が書き込まれているという特徴をもつ一本である。ノートルダム清心女子大学古典叢書第三期1『新古今集断簡』の解説中に所載の、国歌大観番号による残存歌の一覧表を借り、田中博士蔵本の残存歌を追加して示すと次表のようになる。田中博士蔵本の残存歌についてはゴチック体で区別する。

卷	歌番号	歌数	備考
卷第一 恋歌一	一〇三七―一〇四四	八首	一〇三七上句欠、一〇四五詞書のみ
	一〇四八―一〇六二	一五首	一〇六二下句欠
	一〇六九―一〇八〇	一二首	一〇六九作者欠

卷第一二恋歌二

一〇八五—一〇九五 一首

一〇九八—一一〇五 八首

卷第一三恋歌三

一一八七—一一九一 五首

一一九二—一一九六 五首

一一九七—一二〇二 六首

一二〇三—一二〇八 六首

一二〇九—一二一九 一首

一二二〇—一二二三 四首

一二二四—一二二八 五首

一二二九—一二三三 五首

一二三四—一二三八 五首

卷第一四恋歌四

一二四三—一二四七 五首

一二五九—一二六五 七首

一二七二—一二九六 二五首

一三〇三—一三〇八 六首

一三二七—一三三三 七首

一三五七—一三七五 一九首

一四〇三—一四一五 一首

卷第一五恋歌五

一〇八五詞書・作者欠、一〇九五下句欠

一〇九八上句欠

一一八七詞書前半欠

一一九七詞書・作者のみ

一一九七詞書・作者欠、一二〇三作者のみ

一二〇三作者欠、一二〇九詞書前半のみ

一二〇九詞書前半欠、一二二〇詞書後半欠

一二二〇詞書前半欠、一二二四詞書前半のみ

一二二四詞書前半欠

一二四三詞書欠

一二六五下句欠

一二七二詞書・作者欠、一二九六下句欠

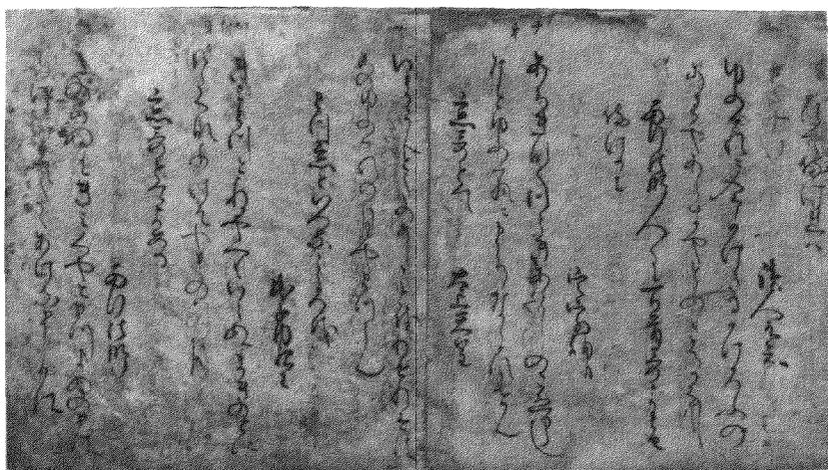
一三〇三作者欠、一三〇九詞書・作者のみ

一三二七上句欠、一三三三下句欠

一三七五下句欠

一四〇三上句欠

卷第一六雑歌上	卷第一七雑歌中 卷第一八雑歌下
一四七三―一四七七	一四七三―一四七七
一四七八イ一四八〇	一四七八イ一四八〇
一四八五―一四八八	一四八五―一四八八
一四九七―一五〇〇	一四九七―一五〇〇
一五〇一―一五〇九	一五〇一―一五〇九
一五一〇―一五一四	一五一〇―一五一四
一五二六―一五三〇	一五二六―一五三〇
一五三八―一五四二	一五三八―一五四二
一五五五―一五五七	一五五五―一五五七
一五九八―一五九九	一五九八―一五九九
一七〇七―一七一―	一七〇七―一七一―
一七二〇―一七二三	一七二〇―一七二三
一七四六―一七七九	一七四六―一七七九
一七七九―一七八四	一七七九―一七八四
一七八五―一七九五	一七八五―一七九五
一七九六―一七九九	一七九六―一七九九
一八〇〇―一八二八	一八〇〇―一八二八
四首	四首
九首	九首
五首	五首
五首	五首
五首	五首
三首	三首
二首	二首
五首	五首
四首	四首
三四首	三四首
五首	五首
一首	一首
四首	四首
二九首	二九首
一四七三上句欠、一四七八イ詞書のみ(ミセケチの作一首あり)	一四七三上句欠、一四七八イ詞書のみ(ミセケチの作一首あり)
一四七八イ詞書欠、一四八一詞書のみ	一四七八イ詞書欠、一四八一詞書のみ
一四八五詞書欠、一四八八下句欠	一四八五詞書欠、一四八八下句欠
一四九七詞書前半欠	一四九七詞書前半欠
一五一〇詞書のみ	一五一〇詞書のみ
一五一〇詞書欠、一五一五詞書前半のみ	一五一〇詞書欠、一五一五詞書前半のみ
一五三八詞書・作者欠、一五四三詞書後半欠	一五三八詞書・作者欠、一五四三詞書後半欠
一五五五作者欠、一五五七下句欠	一五五五作者欠、一五五七下句欠
一六〇〇詞書・作者のみ	一六〇〇詞書・作者のみ
一七〇七詞書欠、一七一一下句欠	一七〇七詞書欠、一七一一下句欠
一七二三下句欠	一七二三下句欠
一七四六上句欠、一七七九下句欠	一七四六上句欠、一七七九下句欠
一七七九上句欠、一七八五詞書・作者のみ	一七七九上句欠、一七八五詞書・作者のみ
一七八五詞書・作者欠、一七九六詞書・作者のみ	一七八五詞書・作者欠、一七九六詞書・作者のみ
一八〇〇詞書・作者のみ	一八〇〇詞書・作者のみ
一八〇〇詞書・作者欠	一八〇〇詞書・作者欠



田中本一丁ウラ、二丁オモテ

(資料紹介) 田中重太郎博士蔵『新古今和歌集』断簡

卷第十三恋歌三は、一一八七から卷末の一二三三までが整ったことになり、また、卷第十五恋歌五の三十二首を補うなど、正宗文庫本の二百三十九首にさらに八十八首を追加することになった。(参考として上に田中本を写真で示す。)この八十八首をご許可を得て以下に翻刻する。なお、破傷した部分があり、とくに恋歌の巻あたりの撰者名注記は判読できない場合がある。注記を一部でも判読できない歌を一応番号で次に示す。一一九二、一一九五、一二〇五、一二〇六、一二二〇、一二二二、一二三二、一二三三、一二三三、一二四五、一三六二、一四〇七、一七八二。

翻刻に際し、仮名遣いなどの表記はできるだけそのままにした。歌は上句下句にわけて二行書きであるが、一行とし、上句と下句の間を一字あけにしている。その他の行替えは、『丁替え』で示した。また、国歌大観番号を付した。破傷している部分は日本古典文学大系の本文をもとに()で補った。

末筆ながら、故田中先生の奥さま美保子夫人にお礼申し上げますとともに先生に心から哀悼の意を捧げる次第である。

藤原知家

1192 これもまたなきわかれになりやせん くれをまつへき命ならねは

西行法師

1193 ありあけは思いてあれやよこくもの た、よはれつるしの、めのそら

藤原元輔
(ママ)

1194 大井河るせきの水のわくらはに けふはたのめしくれにやはあらぬ

けふとちきりける人のあるかと、「ひて侍け

れは」

読人不知

1195 ゆふくれに命かけたるかけるふの ありやあらずやとふもはかなし

西行法師人〳〵に百首哥よませ」侍けるに」定家朝臣

1196 あちきなくつらきあらしのこゑもうし などゆふくれにまちならひけん

恋哥とて

太上天皇」

1203 いまこんとたのめしことをわすれすは このゆふくれの月やまつらん

まつ恋といへるこゝろを」

式子内親王

1204 きみまつとねやへもいらぬまきのとに いたくなふけそやまのはの月

恋哥とてよめる」

西行法師

1205 たのめぬにきみくやとまつよるのまは ふけゆかてた、あけなましかは」

1206 かへるさのものとや人のなかむらん まつよなからのありあけの月
定家朝臣

題不知

読人不知

1207 きみこんといひしよことにふけぬれば たのまぬもの、こひつ、そふる
人丸

1208 ころもてにやまおろしふきてさむきよを きみきまさすはひとりかもねん
左大将朝光ひさしくおとつれ侍らて』

けるにやむことなきおとこのいり」たちてい

ふけしきをみてうらみ」けるを女あらかひけ

れはよみ侍り」ける

平定文

1220 いつはりをた、すのりのゆふたすき かけつ、ちかへわれをおもは、

人につかはしける」

鳥羽院御哥

いかはかりうれしからましもるともに (三) ひらる、身もくるしかりせは」

片思のこゝろを」

入道前関白太政大臣

1222 れはかりつらきをしのふ人やあると いまよにあらはおもひあはせよ

撰政太政大臣家の百首哥合に」契恋のこゝろ

を」
前大僧正慈円

1223 ナ^{被出}た、たのめたとへは人のいつはりを かさねてこそは又もうらみめ

女をうらみていまはまからしと

刑部卿頼輔

1229 牙 こひしなん命はなをもおしきかな おなしよにあるかひはなけれど

西行法師

1230 牙 あはれとて人のこゝろのなさけあれな かすならぬにはよらぬなけきは

みをしれば人のとかとはおもはねと うらみかほにもぬる、袖かな

(女) につかはしける 皇太后宮大夫俊成

1232 (よしき) らはのちのよとにたのめをけ (つらさ) にたえぬみともこそなれ

返し

定家朝臣母

1233 たのめおかんた、さはかりをちきりにて うきよのなかのゆめになしてよ

1243 六 くすのはにあらぬわか身も秋風の ふくにつけつ、うらみつるかな

ひさしくまいらさりける人に 延喜御哥

1244 牙^六ナ しもさやくのへの草にはあらね (とも) などか人めのかれまさるらん

御返し

読人不知

1245 (あ) さちおふるのへや (かるらん山かつの) (か) きをの (草は色もかはらす)

(はるになりてとそうし侍りけるかさも)

』なかり

け (れはうちよりまたとしも)
「かへらぬに」

(のたまはせたり)
「ける御返事を (かへてもみち)」

につけて」

女御徽子女王

1246 ナナ かつむらんほとをもしろすしくれつ、すきにしあきのもみちをそみる

御返し

天曆御哥

いまこんとたのめつ、ふることはそ ときはにみゆるもみちなりける」

すきのこすゑのゆふくれのそら

百首哥中に」

式子内親王

1328 ナナ さりとともとまちし月日そうつりゆく こ、ろのはなの色にまかせて

1329 ナナ いきてよもあすまで人もつらからし このゆふくれをとほ、とへかし

暁恋の心を

前大僧正慈円

あか月のなみたやそらにたくふらん 袖におちくるかねのおとかな」

千五百番哥合に」

権中納言公経

1331 ナナ つくくとおもひあかしのうらちとり なみのまくらになくくそきく

定家朝臣

1332 ナナ たつねみるつらきこ、ろのおくのうみに しほひのかたのいふかひもなし

水無瀬の恋十五首哥合に」

雅経

1333

みし人のおもかけとめよきよみかた』

よみ人しらす

1357

牙 卍 卍 ナ

おもほえず袖にみなとのさはくかな もろこしふねのよりしはかりに

1359 1358

卍 卍

いもか袖わかれし日よりしろたへの ころもかたしきこひつゝ、そぬる
あふこと被出のなみのしたくさみかくれて しつこゝろなくねこそなかるれ

1361 1360

卍 卍

うらにたくもしほのけふりなひかめや よものかたより風はふくとも
わするらんとおもふこゝろのうたかひに』ありしよりけにものそかなしき

1363 1362

牙 卍

うきなから人をはえしもわすれねは かつうらみつゝ、なをそこひしき
命被出をはあたるものとき、しかと つらきかためはなかくもあるかな

1364

卍

いつかたにゆきかくれなん世中に 身のあれはこそ人もつらけれ
被出いまゝてにわすれぬ人はよにもあらし おのかさまくとしのへぬれは

1366 1365

卍 ナ 卍

たまみつをてにむすひても心みん』ぬるくはいしの中もたのまし
山しろのゐてのたま水でにくみて たのみしかひもなきよなりけり

1368

同 卍 ナ

きみかあたりみつゝ、をくらんるこまやま くもなかくしそあめはふるとも
被出なかそらにたちるるくものあともなく、身のはかなくもなりぬへきかな

1370

卍 卍

くものゐるとをやまとりのよそにても ありとしきけはわひつゝ、そぬる

- 1372 1371
 𠄎 𠄎 ひるはきてよるはわかる、やまとりの『かけみる時そねはなかれける
 ナ われもしかなきてそ人にこひられし いまこそよそにこゑをのみきけ
 人丸
- 1374 1373
 𠄎 𠄎 夏野ゆくおしかのつゝつかのまも わすれすそ思ふいかこゝろを
 𠄎 𠄎 夏草の露わけころもきもせぬに などわか袖のかはく時なき
 八代女王
- 1403 1375
 𠄎 𠄎 みそきするならのをかはのかは風に』
 人はたゆともみつゝしのはん
 小野小町
- 1404
 𠄎 𠄎 わか身こそあらぬかとのみたとらるれ とふへき人にわすられしより
 能宣朝臣
- 1405
 𠄎 ナ かつらきやくめちにわたすいは、しの たえにしなかとなりやはてな (ん)
 祭主輔親
- 1406
 𠄎 𠄎 いまはとておもひなたえそのな (かなる)
 水のなかればゆきてたつね (ん)
 伊勢
- 1407
 おもひいつやみの、おやまのひとつ松 ちきりしことはいまもわすれす
 業平朝臣
- 1408
 𠄎 𠄎 いて、いにしあとたにい (ま) たかはらぬに たか、よひちといまはなるらん

- 1409 牙 むめのはなかをのみ袖にと、めおきて わかおもふ人はおとつれもせぬ
齋宮女御につかはしける」 天曆御哥」
- 1410 心 あまのはらそこともしらぬ大そらに おほつかなさをなけきつるかな
御返し 女御徽子女王
- 1411 なけくらんこ、ろをそらにみてしかな たつあさきりに身をやなさまし
題不知 光孝天皇御哥
- 1412 心 あはすしてふるころおひのあまたあれは はるけきそらになかめをそする
女のほかへまかるをき、て」 兵部卿致平親王」
- 1413 ナ おもひやるこ、ろもそらにしらくもの いてたつかたをしらせやはせぬ
題しらす 躬恒
- 1414 心 くもゐよりとを山とりのなきてゆく こゑほのかなるこひもするかな
弁更衣ひさしくまいらさりける」にたまはせ
ける」 延喜御哥
- 1473 牙 くもゐなるかりたになきてくる秋に などかは人のおとつれもせぬ」
はなとやみゆる春夜の月
- 1474 心 おほつかなかすみたつらんたけくまの まつのくまもる春夜の月
除目の、ちかりのなきけるをき、」てよめる みつね

〔注〕この一首ミセケチ

牙 本自被出了
みやこにて春をたにやはすくしえぬ いつちかかりのなきてゆくらん

題不知

法印幸清

1475 ナ ^{被出了}
よをいとふよしの、おくのよふことり つかきこ、ろのほとやしるらん

百首哥たてまつりし時

前大納言忠良

1476 おりにあへはこれもさすかにあはれ也 をたのかはつのゆふくれのこゑ

千五百番哥合に

有家朝臣

(1478)1477 春のあめのあまねきみよをたのむかな しもにかれゆく草はもらすな

崇徳院にて林下春雨といふ事」をつかうまつ

りける』

紫式部

1497 牙 ^{被出了}
めくりあひてみしやそれともわかぬまに くもかくれにしよはの月かけ

みこの宮と申ける時少納言藤原」統理としこ

ろなれつかうまつり」けるをよをそむきぬへ

きさまに」思たちけるけしきを御覽して」 三条院御哥

1498 牙 ^{被出了}
月かけの山のはわけてかくれなは」そむくうきよをわれやなかめん

たいしらす

藤原為時

1499 牙 ^{被出了}
やまのはをいてかてにする月まつと ねぬよのいたくふけにけるかな

参議正光おほる月夜にしひて」人のもとに

1500

まかれりけるをみあら」はしてつかはしける」 伊勢大輔
うきくもはたちかくせともひまもりて そらゆく月のみえもするかな』

二条院讃岐

1510

むかしみしくもゐをめぐるあきの月 いまいくとせか袖にやとさん

月前述懐といへることをよめる」

藤原経通朝臣

1511

うき身よになからへはなをおもひいてよ たもとにちきるありあけの月

石山にまうて侍りて月をみてよみ」侍りける 藤原長能

1512

みやこにも人やまつらんいしやまの」みねにのこれる秋夜の月

題不知

躬恒

1513

あはちにてあはとはるかにみし月の ちかきこよひはこゝろからかも

月のあかゝりける夜あひかたらひける」人の

このころの月はみるやといへりければ」よめ

る

源道濟

1779(1515)1514

いたつらにねてはあかせともろともに きみかこぬよの月はみさりき

夜ふくるまでねられさりければ月の』

やみなるあとの身をいかにせん

五十首哥中に」

前大僧正慈円

1781 1780
邪^一 おもふ事をなと、ふ人のなかるらん あふけはそらに月そきやけき
牙 いかにしていま、てよにはありあけの つきせぬものをいとふこ、ろは

西行法師山きとよりまかりいて、むかし」出
家し侍しその月日にあたりて」侍など申たり
し返しに」

1782
牙 うきよいてし月日のかげのめぐりきて かはらぬ道をまたてらすらん
前僧都全真西国のかたに侍ける時」つかはし
ける」 承仁法親王

1784
牙 人しれすそなたをしのふ心をは かたふく月にたくへてそやる

前大僧正慈円文にて思ほとのこと事も」申つくし
かたきよし申つかはして侍ける」返事に 前右大将頼朝」

1796(1785)
牙 ころもてのやま井のみつにかけみえし なをそのかみの春そこひしき
道信朝臣

1797
同 いにしへのやま井のころもなかりせは わすらる、身となりやしなまし

後冷泉院御時大嘗会にひかけのく」みをして
実基朝臣のもとにつかはす」とて先帝の御時

思いて、そへて」いひつかはしける」 加賀左衛門

1798
たちなからきてたにみせよおみころも あかぬむかしのわすれかたみに

秋夜きりくすをきくという題を「よめと人

くにおほせられておほと」のこもりにける

あしたにその哥」を御覧して」

天曆御哥

秋の夜にあか月かたのきりくす 人つてならてきかまし物を

秋雨を

中務卿具平親王」